

内牧カラト遺跡発掘調査報告書

棟原町文化財調査報告 第6集

1990

棟原町教育委員会

内牧カラト遺跡発掘調査報告書

棟原町文化財調査報告 第6集

1990

棟原町教育委員会

序

内牧カラト遺跡は、以前からその存在が知られていた遺跡であります。このたび、林道開設工事に伴い、その一部の発掘調査を実施いたしました。本書はこの調査結果を『内牧カラト遺跡発掘調査報告書』として刊行するものであります。なお、付載として信仰遺跡であるカンノン塚をはじめとする「内牧カラト遺跡周辺の文化財」の概要もあわせて掲載しています。本書が少しでも今後の調査・研究に資するところがあれば幸いに存じます。

調査を実施するにあたり、奈良県教育委員会をはじめ、関係諸機関ならびに関係各位のご協力を賜り感謝いたします。

平成2年12月

株原町教育委員会

教育長 西田俊也

例　　言

- 1 本書は、奈良県宇陀郡棟原町大字内牧に所在する内牧カラト遺跡の発跡調査結果を収録した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、棟原町役場開発部建設課の依頼をうけて棟原町教育委員会社会教育課が実施した。
- 3 実測図・写真等の調査記録、遺物等は棟原町教育委員会において保管している。
- 4 本書は、柳沢が執筆、編集を担当した。

目 次

第1章 調査の契機と経過.....	1
1 調査の契機と経過.....	1
2 現地調査日誌抄.....	2
第2章 位置と環境.....	3
1 地理的環境.....	3
2 歴史的環境.....	4
第3章 調査結果.....	6
第4章 遺 物.....	10
第5章 ま と め.....	11
抄 錄.....	13
付 載 内牧カラト遺跡周辺の文化財.....	15
1 カンノン塚の測量調査.....	15
2 ダケ（嶽）神社.....	17
3 その他.....	17

挿図目次	図版目次
図1 錦原町位置図.....	3
図2 内牧カラト遺跡と周辺遺跡分布図.....	5
図3 内牧カラト遺跡調査位置図.....	7
図4 内牧カラト遺跡調査区土層断面図.....	8
図5 内牧カラト遺跡構造実測図.....	9
図6 内牧カラト遺跡採集凹石実測図.....	10
図7 内牧カラト遺跡位置図.....	11
図8 カンノン塚地形測量図.....	15
写真目次	図版3 内牧カラト遺跡調査区 第6トレンチ、第7トレンチ、第8トレンチ、 第9トレンチ、第10トレンチ
写真1 調査風景.....	2
写真2 第6トレンチ土坑1・2.....	6
写真3 カンノン塚.....	16
写真4 立 石.....	18
写真5 道 標.....	18
写真6 石 仏.....	18
図版1 内牧カラト遺跡航空写真	
図版2 内牧カラト遺跡調査区 第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ、 第4トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチ、	
図版4 内牧カラト遺跡採集遺物・カンノン塚	
図版5 カンノン塚石仏・嶽神社・ダケ神社	

第1章 調査の契機と経過

1 調査の契機と経過

株原町内牧の南方の山中において、平成元年度より林道内牧カラト線の開設工事が実施されており、その工事予定地は菟田野町と株原町との境界でもある尾根稜線上に及ぼうとしていた。また、この標高約550～600mの尾根稜線上には奈良時代の祭祀遺跡と考えられている内牧カラト遺跡が存在している。この遺跡の範囲が明確でないため、事業者である株原町役場建設課は平成元年6月27日付けで奈良県教育委員会教育長宛てに「遺跡有無確認踏査願」を提出した。踏査結果は、「奈良県遺跡地図、株原町遺跡地図に記載された遺跡の範囲に近接し、遺跡の存在が予想され、発掘通知書の提出が必要」とのことであった。

この回答を受けて平成元年12月15日付けで埋蔵文化財発掘通知書が提出され、奈良県教育委員会、株原町教育委員会、株原町役場等がこの遺跡の取り扱い、調査の実施方法等について協議を行った。この結果、発掘調査は株原町教育委員会が実施することとし、重要な遺構等が発見されれば、その保存等について改めてその取り扱いについて協議することとなった。現地調査は1990年6月12日から7月17日にかけて実施し、うち発掘調査に要した日数は11日である。その後報告書作成等の整理作業に入り、1990年12月28日に本事業を終えた。これらの経過については次節、結果については第3～第5章に詳しく述べている。

なお、調査関係者等は次のとおりである。

調査主体	株原町教育委員会
調査担当課	株原町教育委員会 社会教育課
庶務担当課	株原町役場 建設課
調査担当者	株原町教育委員会 社会教育課 技師 柳沢一宏
調査補助員	井上好美、山本文子、森塚和彦
調査作業員	森田一夫、森田長松、山口勝巳
調査指導	奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所
調査協力	内牧自治会、折井義一、奥田 尚、宮坂敏和

2 現地調査日誌抄

1990年（平成2年）

6月12日（火）曇のち晴

午後、調査予定地内の草刈作業。

6月18日（月）晴

午後、器材搬入。

6月19日（火）晴

第1～第4トレーニング設定。第1・2トレーニング写真撮影。

6月20日（水）晴

第2～第4トレーニング精査。第5・6トレーニング設定。

6月21日（木）晴

第5・6トレーニング精査。第6トレーニングより土坑検出。第1～6トレーニング平板測量、土層断面図作成。第7・8トレーニング設定。凹石採集。

6月25日（月）晴

第3～8トレーニング写真撮影。第7トレーニング精査、平板測量。第6トレーニング拡張。第9トレーニング設定。

6月26日（火）曇一時雨

第6トレーニング拡張。

6月27日（水）～7月4日（水）

雨のため作業休み。

7月5日（木）晴

第10トレーニング設定。

7月10日（火）晴

第7～10トレーニング土層断面図作成。第8～10トレーニング平板測量。第9～10トレーニング

写真撮影。

7月11日（水）晴時々曇

第6トレーニングの土坑掘り下げ、写真撮影、実測図作成。「カンノン塚」測量杭設置。

7月13日（金）晴時々曇

「カンノン塚」測量。

7月17日（火）

「カンノン塚」測量。器材搬出。



写真1 調査風景

第2章 位置と環境

1 地理的環境

大和盆地東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、大宇陀町、櫛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」と総称されている。口宇陀は標高300~400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称されている。大宇陀町、櫛原町、菟田野町の大半がこの口宇陀に含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地（室生火山群の火山地形）、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。櫛原町や菟田野町の西半は低丘陵と小盆地、東半は標高約400~800mの山々と谷地形からなっており、後者は奥宇陀的な地形となっている。

櫛原町の四周は概ね標高約400~800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎ヶ岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とを区切る額井岳、香醉山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。

櫛原町内牧の東方を源とする内牧川は、諸木野川、初生川、西谷川をはじめとする幾つかの小支流を合わせながら、宇陀の主要河川である宇陀川へと注いでいる。櫛原町を後にした宇陀川は三重県へ至って名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。この内牧川沿いには、櫛原と曾爾・御杖とを結ぶ国道369号線（奈良市～三重県松阪市）が整備されている。この道路は、かつて伊勢参宮で賑わった伊勢本街道に代わって主要交通路としての役割を果たしている。

内牧カラト遺跡は、櫛原町内牧と菟田野町入谷との境界をなす標高約550~600mの山塊稜線上に位置し、内牧川流域、芳野川上流域の双方を見下ろすことができる。



図1 櫛原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方のなかでも口宇陀地域の各所に遺跡が存在している。これらは、宇陀川、芳野川、内牧川の各流域に比較的多く分布しているが、近年の開発行為の増加によって改変・消滅しつつある。

宇陀川の川底や内牧川上流域、高田垣内古墳群から有舌尖頭器が出土している。^{文献1)} 造構や他の遺物等は明らかでないが、このことから宇陀の歴史が少なくとも旧石器時代末期から縄文時代早期に求めることができよう。^{文献2)} 内牧川流域では縄文時代の遺跡が多く知られているが、ほとんどが採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。^{文献3)} また、発掘調査によって確認された場合でも数点の遺物が出土しているのみで、遺跡の全容が明らかになったものは少ない。^{文献4・5)} 高井遺跡では、ほぼ全面的な発掘調査を実施し、早期から後期に至る遺物、中期末から後期前半の土坑や住居跡を確認している。^{文献6)} この遺跡は早期から後期にかけて断続的に営まれた集落であるが、その最盛期は後期初頭から前半に求めることができ、奥宇陀と口宇陀とを結ぶ内牧川流域の母集落のひとつと考えられる。

これに対し、内牧川流域の弥生～古墳時代の遺跡数は非常に少ない。文献資料からではあるが、『統日本紀』元明天皇和銅六年（713）秋七月丁卯の条に「大倭国宇太郡波坂郷・長岡野地」において銅鐸の出土が記録されている。この出土地は櫛原町八海字長坂とも菟田野平井とも言われているが詳細は明らかでない。

この流域の展開は次代の奈良・平安時代、中世を待たなければならない。この時期の最も代表的な遺跡としては、壬申の乱で活躍した文祢麻呂がある。現在、銅製墓誌、銅箱、金銅製外容器（金銅壺）、ガラス製藏骨器の出土品は国宝、出土地である墳墓は国の史跡となっている。^{文献7)} ^{文献8)}

奈良時代、内牧川流域には「牧」が営まれていたが、『日本後紀』延暦18年（799）7月条には「修大和国宇陀肥牧、以接民居損田園也」と記され、これらの「牧」の停止を知ることができる。「牧」の所在地は櫛原町桧牧から内牧にかけての地域と推定され、現在の大字名のおこりともなっている。高井遺跡では、奈良時代の建物遺構も検出しており、この遺跡が広がる河岸段丘上は古代の牧であった可能性も考えられる。

古代末には宇陀の地においても莊園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社の支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は秋山氏、沢氏、芳野氏に代表され、彼らのもとには、井足、山辺、桧牧、赤埴、守道、諸木野などの中小土豪武士団が名を連ねている。^{文献9)} それぞれ本拠地としたところには彼らの名が大字名として今も残っている。

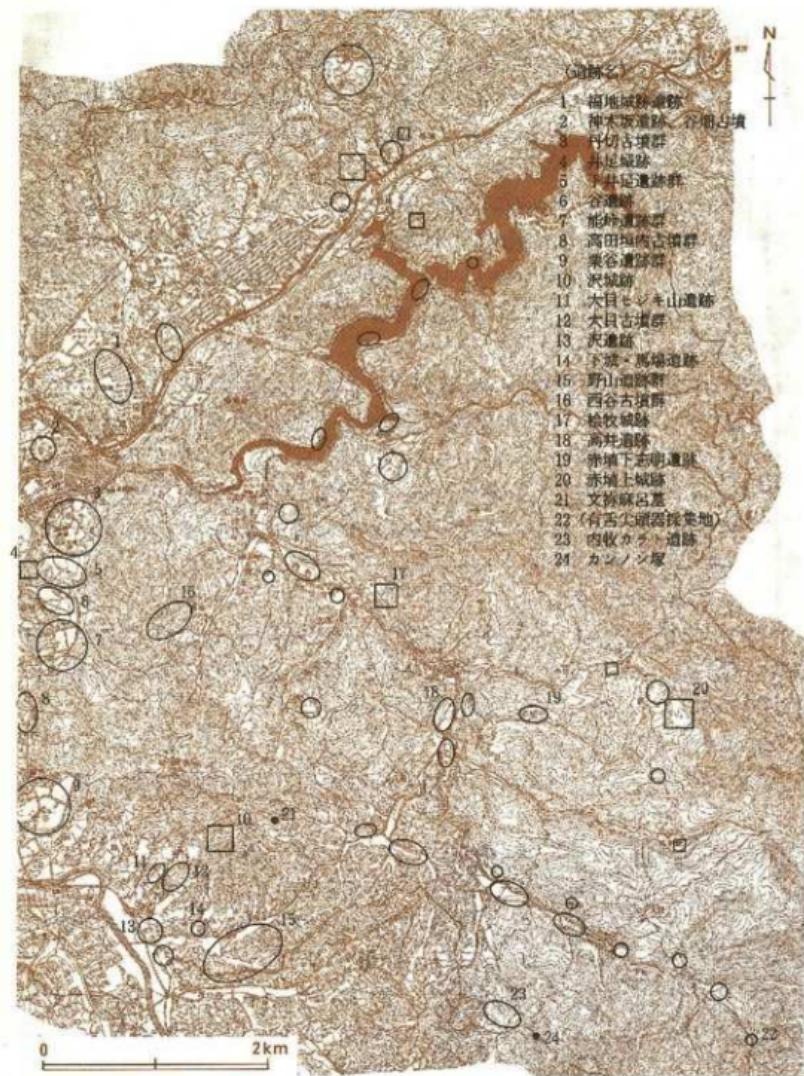


図2 内牧カラト遺跡と周辺遺跡分布図

第3章 調査結果

内牧カラト遺跡は、奈良時代の祭祀遺跡として『奈良県遺跡地図』では遺跡番号105-12、『橿原町遺跡分布調査概報』では遺跡番号4-34として登載されている遺跡である。これまでに須恵器、土師器が採集されているようであるが、遺跡の範囲は必ずしも明らかでない。また、ダケ神社周辺文献(10)でも、過去に石器が採集されているようである。

この遺跡の外縁部から神社周辺にかけて林道が敷設されることになったため、その工事地内において遺跡の範囲等を明らかにする発掘調査（試掘調査）を実施した。調査は樹木の間を縫って10箇所において試掘を行い、北から順に第1トレンチ、第2トレンチ……第10トレンチと呼称することとした。以下、各トレンチの調査結果を述べる。（図3・4、図版2・3）

第1トレンチ (4.5m×1.5m)

基本層序は腐植土（第1層）、灰茶色粘質土（第2層）、地山（橙茶色粘質土：第3層）となっている。地表から地山検出面までの深さは約30～40cmを測る。明確な遺構、遺物は認められない。

第2トレンチ (3.8m×1.5m)

基本層序は腐植土（第1層）、灰茶色粘質土（第2層）、淡黄茶色土（第3層）、地山（灰黄色砂礫：第4層）となっている。地表から地山検出面までの深さは約30～40cmを測る。北端がやや窪むものの、明確な遺構、遺物は認められない。

第3トレンチ (3.5m×1.3m)

基本層序は腐植土（第1層）、灰茶色粘質土（第2層）、淡茶色粘質土（第3層）、地山（橙茶色粘質土：第4層）となっている。地表から地山検出面までの深さは約50～60cmを測る。地山面に凹が認められるものの、明確な遺構、遺物は検出していない。

第4トレンチ (3.5m×1.5m)

基本層序は第3トレンチと同様である。地表から地山検出面までの深さは約30～50cmである、明確な遺構、遺物は認められない。

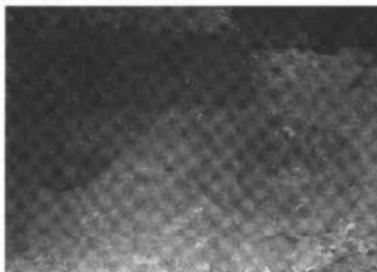


写真2 第6トレンチ土坑1・2

第5トレンチ (3.0m×1.5m)

基本層序は第3トレンチとほぼ同様である。黃灰色砂質土の地山面からは、遺構、遺物は検出していない。

第6トレンチ (3.0m×1.5m、2.0m×1.4m)

基本層序は第3トレンチとほぼ同様である。灰黄色砂礫の地山面から、土坑の一部を検出したため、調査範囲を拡張し、遺構の把握につとめた。

土坑1の平面形は不整円形を呈し、直径1.1～

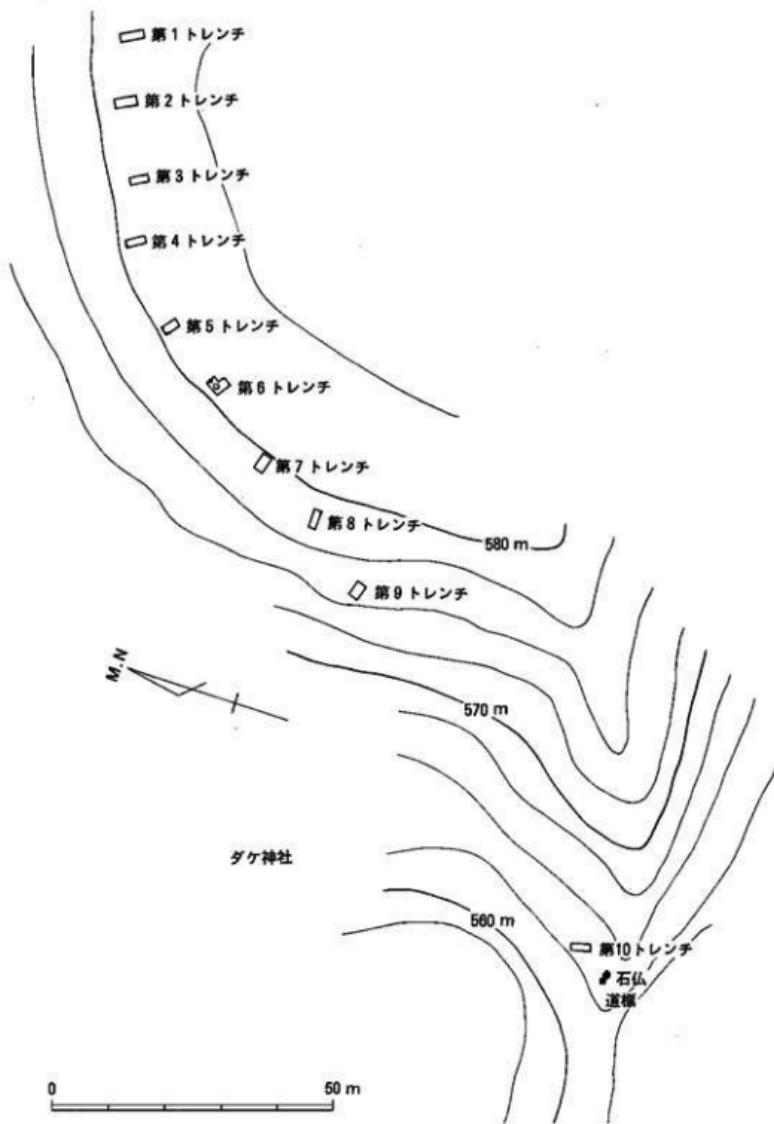


図3 内牧カラト遺跡調査位置図

1.4m、深さ0.46cmを測る。土坑2は直径約0.5m、深さ約0.34mを測る円形土坑である。いずれも埋土は黄茶色土である(図5)。

第7トレンチ(3.1m×1.6m)

基本層序は腐植土(第1層)、灰茶色粘質土(第2層)、地山(橙茶色粘質土:第3層)となってい。西端では後世の擾乱坑を検出している。

第8トレンチ(3.0m×1.5m)

基本層序は第3トレンチと同様である。西端では後世の擾乱坑を検出している。

第9トレンチ(3.0m×1.5m)

基本層序は腐植土(第1層)、灰茶色粘質土(第2層)、地山(灰黄色砂礫:第3層)となってい。西半部は大きく擾乱されている。

第10トレンチ(3.5m×1.5m)

基本層序は腐植土(第1層)、灰茶色粘質土(第2層)、淡茶色粘質土(第3層)、地山(橙茶色粘質土:第4層)となっている。地表から地山検出面までの深さは約60cmを測る。明確な遺構、遺物は検出されない。

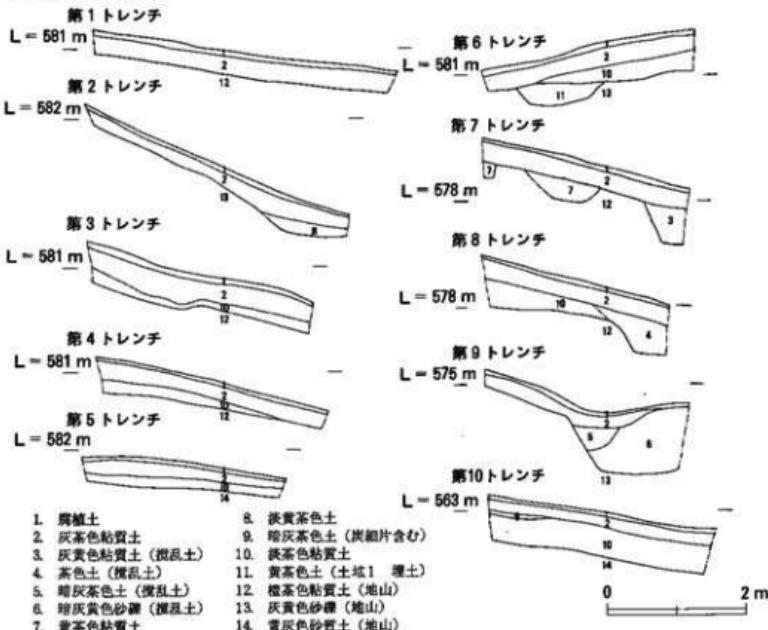


図4 内牧カラト遺跡調査区土層断面図

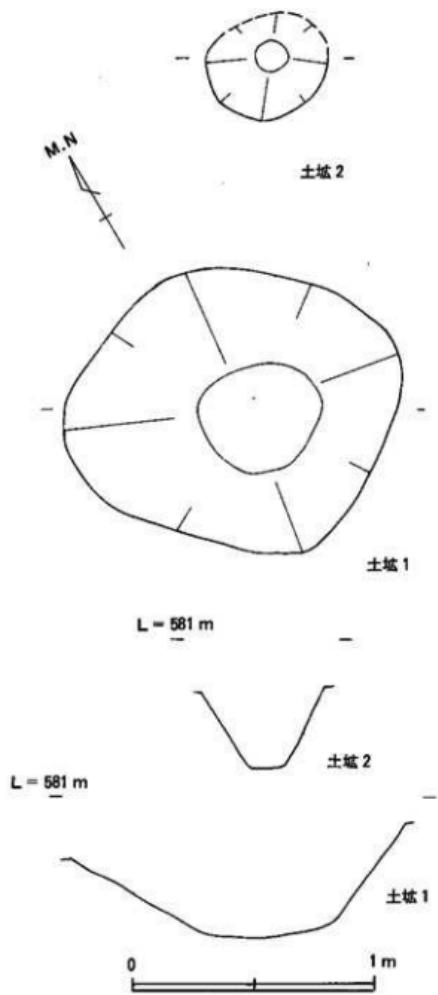


図5 内牧カラト遺跡遺構実測図

第4章 遺物

前章のとおり、各トレンチからは、遺物の出土は認められなかった。ダケ神社背後の斜面から凹石を採集したにとどまっている。

石器・凹石（図6、図版4）

平面形態は円形を呈し、直径8.3cm、厚さ2.5～3.5cmをはかる。約 $\frac{1}{3}$ を欠損し、その現存重量は約380gである。中央部両面には、直径2.7～3.7cm、深さ0.3cmの敲打痕が認められる。また、表面には磨り痕跡が認められる。なお、石材の材質は斑岩である。

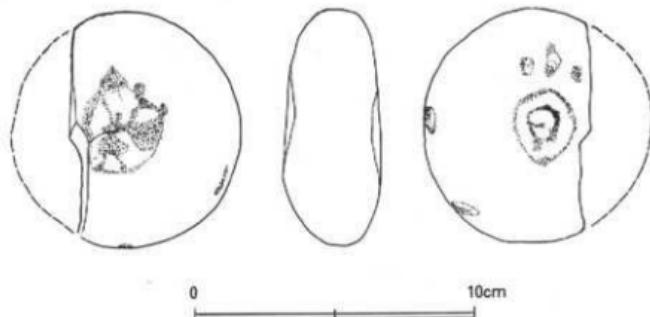


図6 内牧カラト遺跡採集凹石実測図

第5章 まとめ

先述のとおり、10箇所で試掘を行い、その調査面積は合わせて約53.3m²となる。工事予定地内の遺跡の範囲を明かにする目的で試掘調査を実施したが、第6トレンチで土坑を検出したほかは、明確な遺構等は認められなかった。土坑内から土器等の遺物が出土していないため、時期・性格等は明かにできない。調査地の大半は傾斜地にあたるため、ほとんど遺構は検出できなかったが、ダケ神社西下方や東上方には比較的広い平坦面が認められることから、ここに遺構等の広がりが予想できる。このため、従来、考えられてきた遺跡の範囲をさらに南東へ拡げて考えなければならないであろう（図7）。また、採集品ではあるが、縄文時代の凹石が出土していることから、この時代の遺構の存在も十分考えられる。限られた範囲での発掘調査であったため、明かでない点も多く、今後の調査に期するところが大きい。

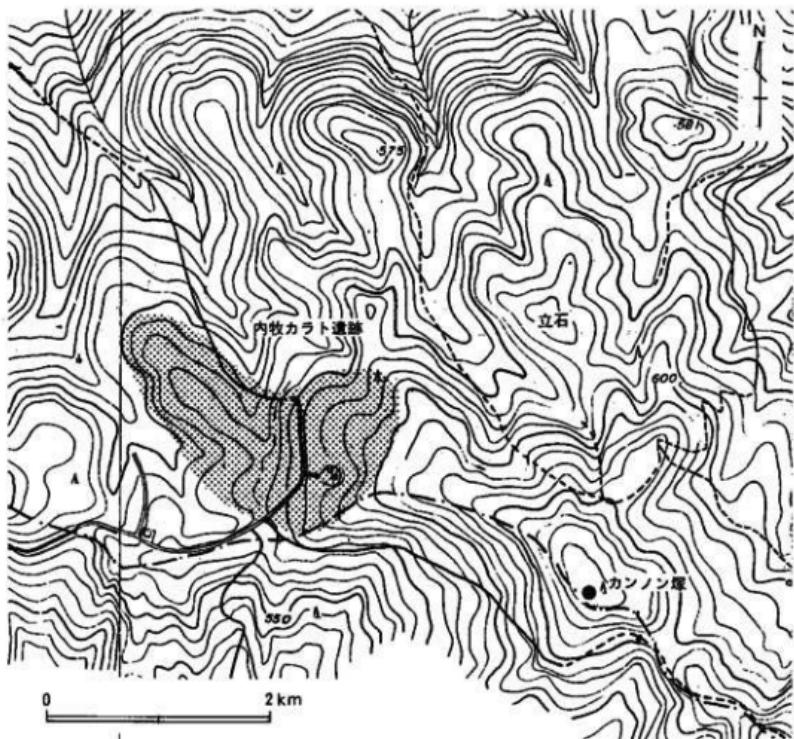


図7 内牧カラト遺跡位置図

参考文献・註

- 文献1) 安達厚三「奈良県宇陀郡宇陀川川底発見の有舌尖頭器」『古代文化』第22巻第3号 古代学協会 1970
- 文献2) 柳沢一宏「奈良県宇陀郡株原町内牧採集の有舌尖頭器」『旧石器考古学』旧石器考古学談話会 1990
- 文献3) 楠元哲夫「高田垣内古墳群」「大和を掘る 1989年度発掘調査速報展10」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1990
- 文献4) 島本 一「内牧石器時代遺蹟とその遺物に就いて」『大和志』第4巻第4号 大和國史会 1937
- 文献5) 島本 一「宇陀郡に於ける石器時代地名表」『大和志』第8巻第11号 大和國史会 1941
- 文献6) 柳沢一宏『株原町遺跡分布調査概要』株原町文化財調査概要2 株原町教育委員会 1987
- 文献7) 東野治之「文祢麻呂墓出土品」『日本古代の墓誌』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979
- 文献8) 泉森 皎ほか「文祢麻呂墓発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報」1981年度 奈良県立橿原考古学研究所 1983
- 文献9) 株原町史編集委員会『株原町史』株原町役場 1959
- 文献10) 「奈良県遺跡地図」第4分冊 奈良県教育委員会 1975
- 文献11) 竹野次郎『神武天皇建國聖地内牧考』菟田高城顕彰会 1939

註) 内牧カラト遺跡と内牧集落内の2箇所に「嶽神社」が存在するため、ここでは便宜上、前者を「ダケ神社」、後者を「嶽神社」とする。なお、詳細は付載において述べる。

抄 錄

遺 跡 名	内牧カラト遺跡
調 査 地	奈良県宇陀郡株原町大字内牧257番地
遺 跡 立 地	標高550～600mの尾根上
遺 跡 規 模	範囲：南北約150m、東西約250m、面積：約25000m ²
種 別	縄文時代の遺物散布地、奈良時代の祭祀遺跡（再確認の必要性）
調 査 名	内牧カラト遺跡発掘調査事業
調 査 主 体	株原町教育委員会（社会教育課）
調 査 担 当	株原町教育委員会社会教育課技師 柳沢一宏
調 査 原 因	林道開設工事
工 事 主 体	株原町役場（開発部建設課）
工 事 廉 务 担 当	1600m ² （遺跡範囲外も含む）
調 査 期 間	1990年6月12日～1990年12月28日 うち、現地調査1990年6月12日～1990年7月17日
調 査 面 積	53.3m ²
検 出 遺 構	土坑 2
出 土 遺 物	凹石（縄文時代：採集資料）
調査資料の保管	株原町教育委員会（文化財整理室）

付載 内牧カラト遺跡周辺の文化財

1 カンノン塚の測量調査

はじめに

ダケ神社の東南東約300m、標高約645~650mの山頂にカンノン塚、ダケなどと呼ばれている小塚がある。行政区画では、棟原町内牧771番地（小字名：蛇ハミ）と菟田野町入谷とにまたがって位置している（図2）。かつて、下方のダケ神社からこの小塚を拌んだともいわれているが、今はそれを知る人も少なくなっている。内牧カラト遺跡の発掘調査に伴い、関連遺跡の調査としてこの小塚の地形測量・写真撮影を実施したので、その結果をここに報告するものである。以下、小塚の名称は、先に述べた「カンノン塚」の呼称を用いることとする。

なお、時間的制約から任意高（比高）によって測量していることを付記しておく。

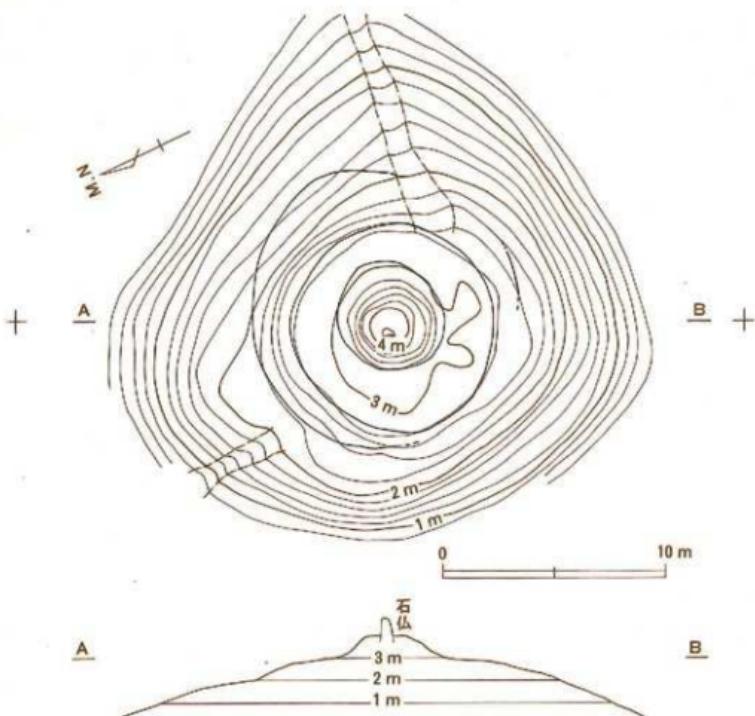


図8 カンノン塚地形測量図



写真3 カンノン塚

塚の現状（図8、写真3、図版4・5）

この測量調査と並行して、周辺の踏査も実施したが、同様な塚は認められず、カンノン塚は尾根稜線上の高所に単独で位置することが明かとなった。この塚は、基段部と塚部（小塚）の上下2段からなり、その平面態はいずれも円形を呈する。基段部は南北の裾部が明瞭でないものの、裾部径約12m、上面径9m、東での高さ1.25m、南での高さ約0.3mを測る。この基段上面の縁辺部（2.75m ライン）には、付近で産する流紋岩質の熔結凝灰岩、いわゆる「棟原石」が縁石状にめぐらされているが、裾部では、その傾向を窺うことはできなかった。

基段部の中央には、直径4.5～5m、高さ1mの円墳状を呈した小塚が築かれている、この小塚頂部の中央には西に面した石仏（般若菩薩立像）が建てられているが、これには年号等の銘は認められない。塚部の各所で棟原石が露出し、また、その周辺にも同様の石材が散乱していることから、塚部は積み石によって形成されていると考えられる。なお、基段部は地山をある程度成形したのち、盛土によって形成されていると思われる。以上のような状況から、この遺跡は、古墳ではない塚と考えられる。

小 結

「塚」は民俗学、考古学の両面からの調査・研究が進んできており、発掘調査等が実施されたものも少なくない。塚は十三塚と関係があるともいわれている「十三塚」、民俗信仰に関わる「富士塚」、「狐塚」、「供養塚」、「庚申塚」等、そして、行人や道者の修行場・祭場・入定跡である「行人塚」、「山伏塚」、「念仏塚」等の3種に大別されているが、いずれも信仰遺跡の範疇でとらえられている。

奈良県内では、生駒十三峰の十三塚、中曾司十三塚をはじめいくつかの塚が確認されているが、単独で位置するものとしては、大淀石塚、矢田積石塚、棟原一本松塚が知られている。大淀石塚は大峯信仰による山伏塚、矢田積石塚は矢田金剛山寺参拝による供養塚として造られたものと考えられている。また、棟原一本松塚は陶器小皿を用いた簡易な祭祀の後、盛土が行われた状況が明かくなっている。なお、未調査ではあるが、棟原町高塚に所在する「鷹塚」、「犬塚」などと呼称されている塚もこの種類に含まれるものと思われ、後者には幾つかの石造物が建っている。

「塚」の築造時期は、発掘調査により出土した寛永通宝等の銭貨、少量の土器等、また、造立されている石造物等から普通、近世以降と考えられているものが多い。

カンノン塚の場合、出土品、石仏の紀年銘等が認められず、具体的な伝承等も聞かないので、築造時期や塚の性格を明確にできないが、現段階では近世頃のダケ神社信仰と関わった信仰遺跡としておきたい。

2 嶽（ダケ）神社（図版5）

第3章で若干、触れたとおり、内牧地区にはふたつの「嶽神社」が存在する。ひとつは、内牧カラト遺跡内、そしてもうひとつは内牧集落内に位置する。ここでは便宜上、前者を「ダケ神社」、後者を「嶽神社」と呼称する。

ダケ神社は山塊の西中腹、棟原町内牧256番地に位置し、付近一体は、小字名と同様、「ダケ」と呼称されている。この神社の創祀は明かでないが、雨神・水神である高大加美神（高霧神）を祭神としている。古くは内牧村、入谷村、大神村、見田村の4箇村の神社として祀られていたが、明治45年（1912年）には内牧集落内の伊豆神社に合祀され、これ以後、内牧地区の神社となったという。そして約30年前に旧地である山腹に分祀され、現在に至っている。「ダケの明神さん」とも言われるダケ神社は、毎年、9月15日に伊豆神社の氏子によって祭典が執り行われている。

伊豆神社境内には、この本殿のほか、右側に山を下りてきた嶽神社の社、左側には八幡神社の社をそれぞれ構えている。嶽神社の社殿の造営時期は明らかではないが、内部には嘉永2年（1849年）の棟札が納められている。その他には、棟札や古文書等は認められない。一方、伊豆神社は長和3年（1014年）に伊豆山神社より伊豆走瀬大権現を勅請したことに創まり、文治元年（1014年）に神号を得たと言われている。現在の社殿は天保3年（1832年）造営され、内部には天保3年（1832年）と万延元年（1860年）の棟札が納められている。

先述のとおり、ダケ神社の創始は明らかでないが、祭神から雨・水・雨乞いに関係した祭祀によったものであることは、十分に想像できる。遺跡地図に登載している「奈良時代の祭祀遺跡」にまで遡る可能性もあるが、詳細は明かでない。呼称からも「ダケ」信仰が大いに関わっていることが推察できるが、これは町内に点在する「ダケ」とともに改めて検討していかなければならないと考えている。

3 その他

「嶽の立石 蛇はみの蛇石 こけて鼻うつ唐戸石」と『宇陀郡史料』（宇陀郡役所1917）にうたわれているように、内牧カラト遺跡周辺の山中には三名石（三奇石）がある。立石（写真4）とは、高さ約2～4mの柱状に立っている自然石数石の総称である。磐座状を呈しているが、周辺で遺物等の散布は認められない。なお、現在は信仰の対象とはなっておらず、祭祀の伝承も聞かない。蛇石とは、石材の表面に蛇が這ったような細長い溝状の産みがあることからつけられた名称であり、カソノン塚周辺の小字名「蛇ハミ」は「蛇はみの蛇石」に起因するものとも考えられる。最後の唐戸石（カラトの寝石）とは山腹に幾つもの棟原石がベット状に横たわっていることから付けられた名称である。「カラト」はこの地域の総称ともなってきており、今回の調査対象地となつた遺跡や林道の名称に「カラト」を冠している。

菟田野町入谷から町境界に沿って山を登ってきた道は、ダケ神社の南方約70m（第10トレンチ南西隣）で菟田野町側と棟原町側へとそれぞれ分岐する。その分岐点の傍らには、「左　うちのまき　右　山みち」と刻まれた道標（写真5）と傾いた地蔵石仏（写真6）がある。道標は根元まで露出しているものの、原位置をさほど離れていないものと考えられる。いずれも銘文等は認められず、詳細な年代は明かにできないが、近世頃の所産であろうか。

参考文献

- 大場磐進『神道』『新版考古学講座』第8巻 雄山閣 1971
村社仁史ほか『生駒十三峠の十三塚』平群町教育委員会 1984
泉森経・河上邦彦『宇陀福地の古墳』奈良県教育委員会 1972



写真4 立石

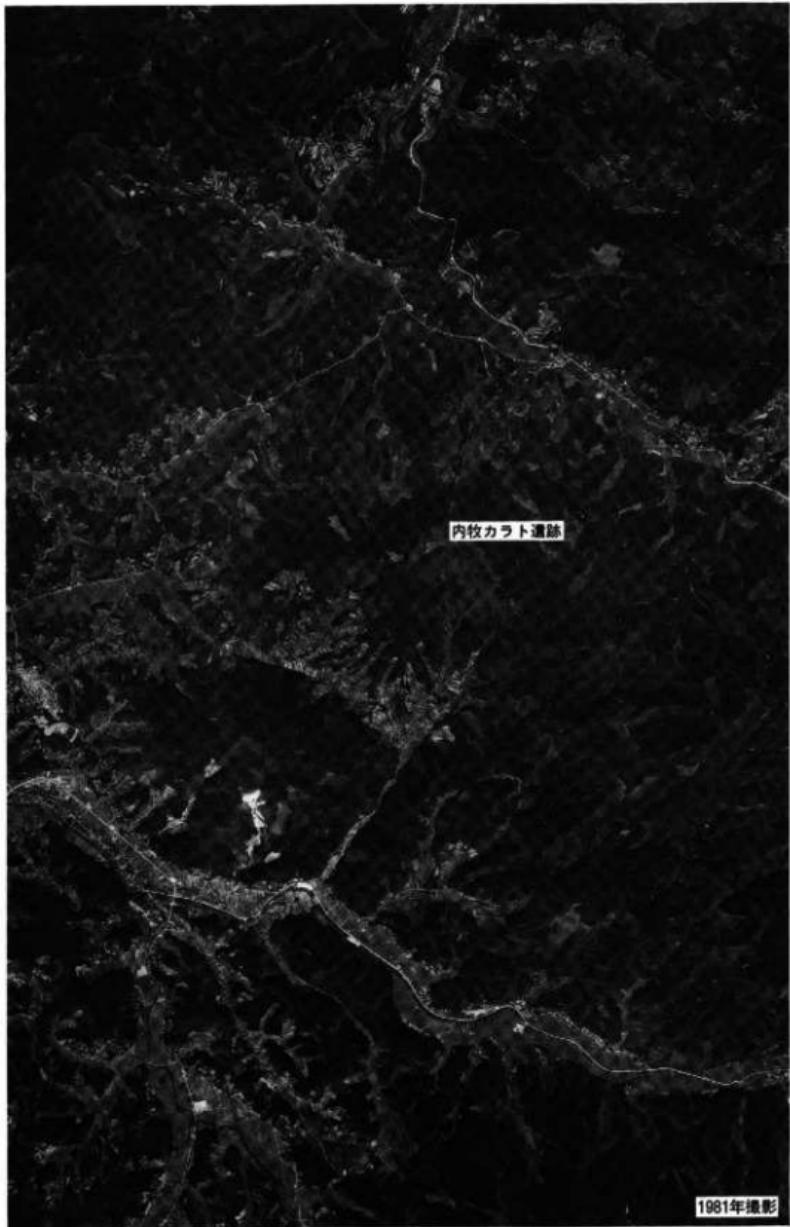


写真5 道標



写真6 石仏

図 版

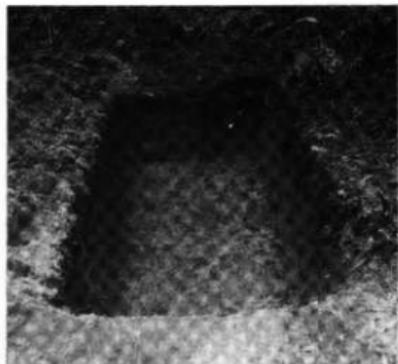




第1トレンチ（北西から）



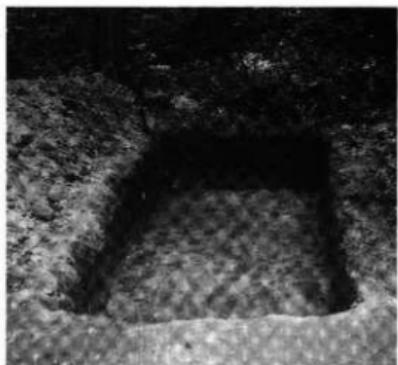
第2トレンチ（北から）



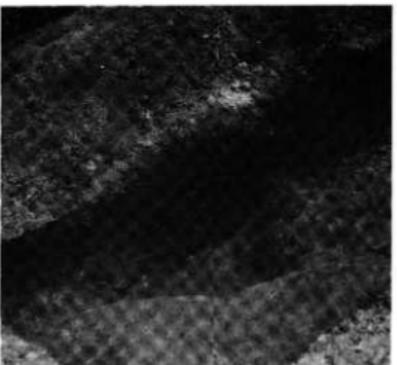
第3トレンチ（北西から）



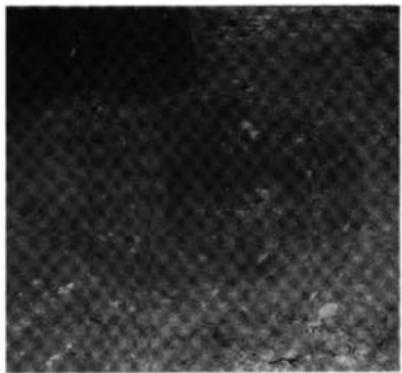
第4トレンチ（北西から）



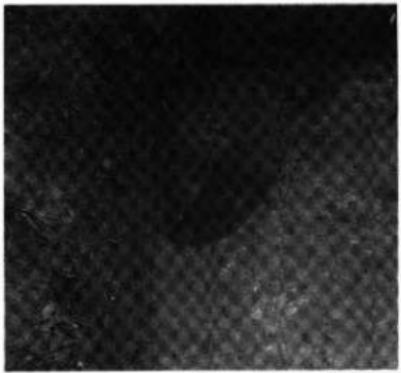
第5トレンチ（北西から）



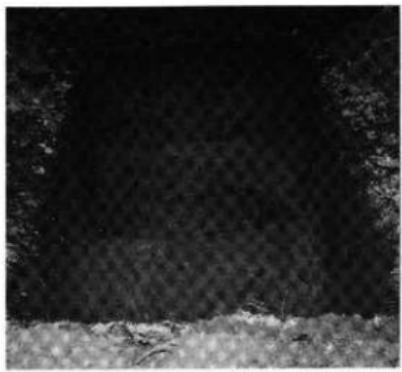
第6トレンチ（南西から）



第6 トレンチ土塗1（西から）



第6 トレンチ土塗2（西から）



第7 トレンチ（西から）



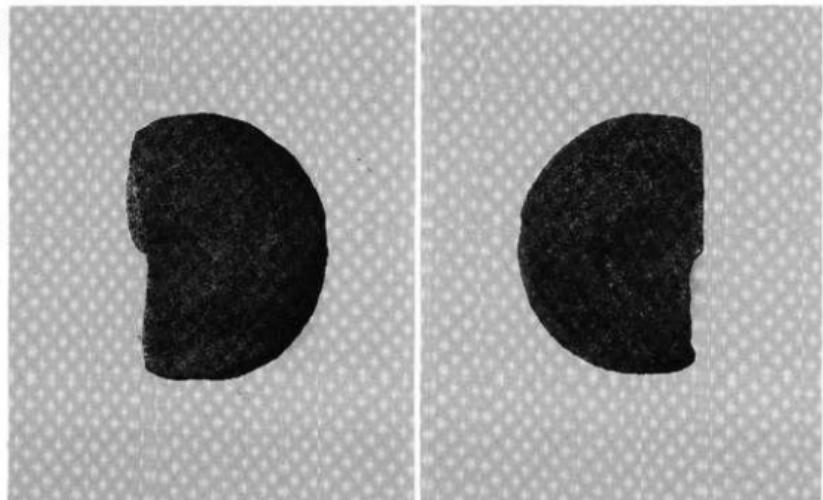
第8 トレンチ（北西から）



第9 トレンチ（西から）



第10 トレンチ（北から）



四 石



カノン塚



カンノン塚石仏



嶽神社



ダケ神社

内牧カラト遺跡発掘調査報告書

橿原町文化財調査報告 第6集

1990年12月28日 発行

編集 橿原町教育委員会
発行 奈良県宇陀郡橿原町大字萩原164番地

印刷 共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号